

自然の美しさを実感する季節、秋が訪れました。山々は色づきはじめ、せせらぎの流れも透明な冷たさを増しているようです。私達にとって、山や水は神々しさや、畏敬の念の対象でもあります。

道元禅師は自然を単に自己の外側にある対象にとどめず、お釈迦様の姿の現れとして受け止められる身と心を備えるよう『正法眼蔵』「溪声山色」の巻で示されました。そこでは初心の志として菩提を求めようとする心と、仏様のみ教えに触れること、自己の心を清める実践の大切さが説かれました。

その前提に立って、更に一歩進めた内容が『正法眼蔵』「山水経」の巻で説かれています。「山水経」は山と水のお経という意味です。お経はご存知のように、文字で書かれ、それを声に出した言葉で読まれています。自然の代表である山や水と、私たちとの間のある仕切りを超えていくことは、文字や言葉に対する私たちの認識を変えるところから始まるのだと道元禅師は考えました。

例えばこの「山水経」の巻に取り上げられている禅の言葉に「深い緑の山々は、常に歩み続けている」とか、「東の山が水の上を進んでいく」などがあります。

一見あり得ないような状況ですが、そもそも文字や言葉は、あり得ないと思われるようなことでも表現できます。「亀の体毛」や「冷たい火」などがそうです。ここで私たちは、何らかの状況を伝えるための手段として文字や言葉は用いられるもので、それは必ずしもありのままの姿を伝えているとは限らないということに気付かねばなりません。私たちが異なった視点か

## 『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

---

ら物事を捉えた場合、さらに私たち以外の生き物の視点から物事を捉えた場合、通常あり得ないと思う状況も成り立ちます。山が動かないのはこの大地に私たちが立っているからで、宇宙から見れば状況は一変します。私たちが氷として捉えているものも、魚にとっては大事な住み家となるのです。

大切なのは私たちの通常の見方が必ずしも絶対的なものではなく、相手とどう関わるかによって、それぞれ違った姿をこちらに見せてくるものなのだということです。従って自分と<sup>あいたい</sup>対した自然といった分けかた自体も実は怪しいものだということです。

私たちの通常の見方や世界観に揺さぶりをかけられたときに、そこでどのように行動を起こし、働きかけていけばよいのでしょうか。仏道修行とは正にここから始まるのかもしれませんが。

— 終 —